

昭和63年12月12日

同窓生シリーズ⑦



バラ育種家 鈴木省三氏  
旧5回生(昭和6年卒)  
1982 ローマ新種コンク  
ールにて  
グランプリ受賞  
現在 京成バラ園研究所長

ただ一つのもの  
それば自分である

鈴木省三

《バラの新品種作りにかける世界的育種家の鈴木省三氏は、朝陽バラ会例会后、その熱き半世紀を語って下さいました》  
秋のバラは小さいけど色が澄んで美しいものです。朝起きたらバラに「お早ようございます」そして、「今日の調子はどうですか」と語りかけるのです。赤ん坊に接するよ

うに。彼らが何を欲しているのかは、三年かけて発表しなければと思う研究があるのです。このエネルギーはどこから湧いて来るのでしょうか

いるかわかるには愛情をかけることが何よりも大切なことです。

《鈴木氏は父親譲りで理科の得意な生徒でした。が、中学三年の時、新宿駅近くでトラックにはねられて足と肺をやられて、学校をきも欠席されました。理科の遅れは深刻で、進級してもかなり厳しい状態で、憂うつな日々を過ごされました。しかし、夜空をながめ天文学者も悪くないと思われ

た。植物が好きだった父上の影響もあって学校の校庭の片隅に、数人の友だちと花壇を作って楽しんで居られました。自然科学への芽は既に、

《黄色いバラ》  
駒沢の府立園芸中等学校への入学を決めたのですが、この学校とはいい出合いがあったのです。中学一年の時、そこへ引っ越して行きました。沢山のコスモスと、大変珍しい黄色いバラが咲いていました。私が好きだと言いましたら、その黄色いバラを切ってくれたのです。この感動と花好きの父の影響で、バラの道へと進路を決定しました。

戦中戦後の「花よりだんご」の飢えた時代にはバラ栽培は迫害され、「バラの新種を日本から出そう」と強く決心した育種事業は、耐える事をよぎなくされました。しかし、生来のハングリー精神は旺盛なもので、とどろきバラ園を守りぬきました。昭和二十三年の銀座資生堂での第一回バラ展は、内外にこれぞ日本の復興と印象づける好結果を生みました。バラ栽培は日本中に普及し、昭和三十

四年には京成電鉄から乞われ、京成バラ園が開園されました。育種の本当の研究を始めたのは五十八歳からでした。  
《ローマ大賞受賞の「乾杯」、ハンブルクで受賞の「天の川」そして「聖火」等々、日本の名花を鈴木氏は世界の庭へと送り込まれて居られます》

◇当時六中は阿部校長から欧州視察から帰られ、イギリスのイートン

校ならぬ東洋のイートン校にならなくちゃいけないって、「君たちは東洋のイートンである」って、これは校長の一つの夢だったんでしょうね。それから堀江賢二先生、サイエンティフィックな人間を造るには中等教育からやらなきゃ。大和魂だけでは駄目だと言って一高から六中に入りて来られた。子供心にもとても魅力を感じた先生でした。

◇世に出るバラの花  
昭和十一年に、とどろきバラ園を開園し

た。植物が好きだった父上の影響もあって学校の校庭の片隅に、数人の友だちと花壇を作って楽しんで居られました。自然科学への芽は既に、